

〈論文〉

大学入学共通テスト英語リーディング問題の 多角的検討

新美 徳康

はじめに

令和2年度1月初旬、前身の大学入試センター試験に代わる大学入学共通テスト（以下、共通テストと略）が初めて実施された。センター試験を廃止し、共通テストへの移行が決定されて以来、大学入試改革の理念そのものの危うさや、入試の制度的欠陥に関するさまざまな批判がされてきた。なかでも、試験科目の1つとして設定されている外国語の「英語」は、「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」の「4技能」を評価すべく、民間試験導入が当初から計画され、採点の質の保障を含む英語入試改革の重大な問題点が指摘された¹。大学入試の民間試験委託に反対する専門家や高校教育現場の声が届き、試験実施約1年前に、民間試験導入が見送られ、最悪の結末は免れた。しかし、初めての共通テストが実施されると、読解力ではなく、「情報を読み取って手早く処理する」ような情報処理能力が求められるのではないかという批判²が上がった。また、出題内容が実用英語に傾きすぎていることや、本当に思考力を問う問題としてふさわしい出題であったのかなどの懸念も上がっている。共通テストの出題内容や出題方法の実態から、日本の英語教育の目指すべき方向性にも注目が集まっていると言えよう。

1 詳細は南風原（編）（2018）を参照

2 代表的なものに「【初めての共通テスト(2)】鳥飼立教大名誉教授に聞く」『教育新聞』（https://www.kyobun.co.jp/news/20210201_06/ 最終閲覧日：2021年3月1日）

自身の「英語」に対する価値観や「思考力」の捉え方に依拠し、試験問題を安易に批判することは避けるべきである。大学入試はハイ・ステークスな試験であることや、大学入試である前に、言語テストであるといった前提も考慮しなければ、英語科で「何」を測定する意図で、「どのように」出題し、評価を行っていけばよいのかについて建設的な議論を生まない。本稿では、さまざまな観点から大学入学共通テスト英語問題の在り方を検討していくことで、その複雑性を論じ、解決の糸口を模索する。

1. 大学入学共通テストの目的

テストを作成する際、第一に「何のためにテストを行うのか」というテストの目的を明確にしておく必要がある（チャールズ・オルダーソン他，2010）。テストの種類は主に表1のように分類される。

表1.

テストの種類	目的と特徴
熟達度テスト (proficiency test)	言語における能力を測定するテスト。特定の学習カリキュラムを前提としない。
到達度テスト (achievement test)	言語の授業やコースにおいて生徒がどれくらい目標を達成したかを測るテスト。出題内容は学習カリキュラムや教科書内容に一致する。
診断テスト (diagnostic test)	学習者の強い点と弱い点を明らかにするために使われるテスト。
進度テスト (progress test)	学習者の学習進度をいくつかの段階に区切って把握するためのテスト。
レベル分けテスト (placement test)	学習者をそれぞれの能力に応じたクラスなどに配置するために行われるテスト。

小泉他（2017）p. 40, チャールズ・オルダーソン他（2010）pp. 23-24 を参考に筆者が作成

一方、テストは試験の性質上、ハイ・ステークスな試験とロウ・ステークスな試験の2つに分けられる。受験者にとって結果が人生に大きな影響を

与える試験はハイ・ステークスな試験、試験の結果が受検者にそれほど重要な影響を与えない試験はロウ・ステークスな試験と呼ばれる（光永，2017）。大学入試はハイ・ステークスな試験であり、個々の受験生の学力が安定的に測定され、個人について精度の高い情報が得られなければならない（大塚，2020）。

大学入試センターは、「大学入学共通テストは、大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的とするもの」と公式に発表している³。特定の教科書に基づいているわけではないが、日本の高等学校学習指導要領で規定されている内容を学習の目標とし、その目標の達成度を測るために実施することを主目的としているため、到達度テストの位置づけであることが分かる。一方、「令和3年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」には、大学教育の入口段階で共通に求められる力も問いたい能力としている⁴。大学教育の基礎力として具体的に定義された能力は見受けられず、判然としない。高等学校教育の成果と大学教育の基礎力を同じとみなすこともできるが、テストの目的を考えるうえで区別されなければならないと考える。

このように、共通テストは、テストを行う目的の設定の時点で複雑性を有している。共通テスト問題を評価する際は、到達度テストとして学習内容の達成度を適切に測定できる問題であったか、選抜試験として適切な出題内容・方法であったか、大学教育を受けるために必要な能力を適切に測定できる問題であったかの3つの視点から判断しなければならないと考える。

2. 高等学校学習指導要領と共通テスト問題作成方針

次期高等学校学習指導要領は令和4年度に完全実施される予定である。初めて共通テストが実施された時点では、現行の学習指導要領が運用されている。本来、2節で検討したように、共通テストが到達度テストの位置づけであるとすれば、目標が変わっていないにも関わらず、センター試験から共通テストに評価方法が変わるということはありません。次期学習指導要領改訂

3 前身のセンター試験とテストの目的は変わっていない。

4 大学教育で必要とされる英語能力（ニーズ）を分析して共通テストが開発・作成されることになれば、到達度テストとして位置付けられる可能性もあるが、共通テストを行う主目的とは異なる。

を見据えて、先行的に実施しているものと思われる。

次期高校学習指導要領では、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の領域ごとに目標が整理されている。本稿では、「読むこと」の目標のみ取り上げる。

「英語コミュニケーションⅢ」の目標

(2) 読むこと

ア 日常的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、必要な情報を読み取り、文章の展開や書き手の意図を把握することができるようにする。

イ 社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、文章の展開に注意しながら必要な情報を読み取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができるようにする。

文部科学省（2017）p.76 より

また、指導要領解説には以上の目標が達成できるように、授業内でどのような言語活動を行うことが想定されるかが明記されている。「読むこと」の領域では、電子メールやパンフレット、新聞記事や広告、物語などから必要な情報を読み取る活動を行うようにということまで書かれている。

共通テストでは、英語科に限らず、教科全体で「思考力」を重視して評価を行うことが問題作成方針や実施大綱に全面的に示されている。英文読解時にはたらく思考力は、1文1文を丁寧に読み進めることで英文を正確に解釈していくことから、文章構造を捉えること、明示的には書かれていないことを推論することまで多岐にわたる。しかし、国が想定している英語の「思考力」は、「目的に応じて必要な情報を読み取る力」、「概要を捉える力」、「要点を捉える力」の3つの能力に限定している。少々乱暴な言い方をすれば、目的に応じて効果的に読むことができれば、思考力が高いと判断される。共通テストが「思考力」を重視する到達度テストであるならば、目的に応じて必要な情報を読み取る力、概要を捉える力、要点を捉える力がどのくらい身につけているのかを評価できるような出題になる。

「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」には、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要な情報を読み取る力

等を問うとしている。様々なテキストとは、先に挙げた電子メールやパンフレットなどの媒体が想定されていると考えられる。国が示している英語科における読解力は、テキストの部分の把握と全体の把握の2つの視点のみで捉えようとしている。この2つの達成度を評価する問題を作成しようとするれば、テキストはバラエティに富むが、測定したい能力はかなり限定的なものになることが予想できる。学力テストの読解問題を作成する時は、一つの読解技能に偏ることなく、できるだけ多様な技能を測る問題を作成し、バランスをとることが大切である（卯城, 2012）。また、選抜試験であることも考慮すると、問う能力を限定しすぎるのではなく、読解力に関わる能力が幅広く問われなければならない。

3. 教育測定学的検討

Bachman & Palmer (1996) は言語テストが備えるべき特質として、有用性を挙げ、その有用性を信頼性、構成概念妥当性、真正性、相互性、影響、実用性の総和と定義した。渡部 (2020) は、大学入学試験では、特に信頼性（測定の安定性）、実行可能性、公平性が重要と主張している。信頼性を確保するためには、ある程度の問題数が必要である。1つのテキストに対して作成できる問題は限られているため、いくつものテキストを用意しなければならない（卯城, 2012）。実際の共通テストを見てみても、1つのテキストにつき4問程度の設問で構成されており、約10の異なるテキストが使われている。受験者は異なる10のテキストを時間内に読み、設問に正解しなければならないため、必然的に大量の情報を素早く処理することが求められる。

信頼性の点から、安易にテスト項目を削減することはできない。卯城 (2012) は問題同士が深く関連し合うことは避けなければならないが、1つのテキストでも、指示語がテキスト内で何を示しているかを問う問題を取り入れることや、選択肢のうち、文章内容にあっているものをすべて選ぶ問題を取り入れることで、出題数を増やすことができると提案している。

開発した問題が、本当に信頼性が高いかどうかをテスト実施前に判断することは難しい。日本では、テスト問題の解答が公表され、次回以降のテストで同じ問題を出題することができず、テスト項目についてのデータ（困難度

や識別力など)が蓄積されていっていない⁵。テスト前に、テストの項目困難度や識別力が分からない状態で本試験を実施しなければならないのが現状である。そのため、共通テストが適切な選抜機能をもっていたかどうかは事後検証に委ねられることになる。次回以降のテストをよりよいものにするために、共通テストの事後検証を十分に行い、次回の出題内容・方法を検討する必要がある。

4. 教科教育学的検討

共通テストはこれまでのセンター試験と比較して、「実用的な英文が多く出題された」と多数のメディアが報じている。「コミュニケーション能力の育成」が英語科における主な目標として掲げられているため、評価もコミュニケーションを念頭に置いてデザインしていくことは当然である。根岸(2007)は、コミュニケーションテストの条件を3つ以下のように示している。

1. 文脈を明確に示す
2. 現実世界で起こりそうなテスト形式を選ぶ
3. テストで提示する英文も実社会で使いそうなものを選ぶ

実際の共通テスト問題は、全ての大問に英文を読む目的・場面・状況が英語で示されている。第1問のAを例に挙げると、“Your dormitory roommate Julie has sent a text message to your mobile phone with a request.”という文脈を示している。第5問は、スピーチコンテストで発表するために、物語を読んで、その内容をプレゼンテーションスライドにまとめるという文脈があり、実際に教室場面で行われそうなタスクである。受験者はスライドの空欄部分に入る英文を選択肢から選ぶことになっている。共通テストを見る限り、コミュニケーションテストの条件を十分満たし、好ましい傾向であるように思われる。しかし、コミュニケーションテストを意識するあまり、受験者が正答できるためにはどのような能力が必要になるのか、実際にどのようなプロセスを経て選択肢を選ぶのかについての検討が不十分になってはいないだろうか。

5 「日本的テスト文化」と呼ばれる。

英語の授業では、物語をじっくり読んで内容を要約し、相手に分かりやすく伝えるためにスライドを作成するプロセスを重視することが想像できるが、テストでは、スライドの空欄に入りそうな内容をなるべく早く本文から取り出し埋めるといった単純作業になってしまう。これでは、情報処理能力が測定されていると言われても仕方がない。また、さまざまなテキストを読むことはそれぞれのテキストの特徴があらわれるため重要であり、積極的に取り入れられるべきだと思われるが、テキストに応じて、異なる読みが求められるような出題になってはいない。

複数の文章から情報を読み取る問題はこれまでのセンター試験にはない出題形式であり、より現実世界で起こりうるタスクである。TOEICでは2006年の問題リニューアルからすでに *double passage* の問題が追加されている（卯城，2012）。このような新たな出題形式にすることで一体どのような力を測定したいと考えているのだろうか。

次期学習指導要領解説には、英語の授業で「ある事柄に対して異なる視点から書かれた複数の論証文や記録文などを、それぞれの論点の違いを整理しながら内容を把握する活動」（p. 83, 下線は筆者）を行うことが想定されている。複数の文章を用いる意図は、同様の話題でも、異なる筆者によってどのように表現されているのかに注目しながら分析的に読むことを促すためであると考えられる。一方、実際の共通テストでは、英文と表やグラフ、手紙や電子メールの受信と返信といった2つの情報源の中から設問に答えるために必要な情報を探し出すことや、情報を照らし合わせる事が受験者に求められた。複数の文章を用いる意図が、共通テストで具現化されていたとは思われない。解答時間に厳しい制限のある大学入試で、本来の意図通りに問うことが可能であるかを検討しなければならないだろう。

本節で取り上げたいずれの出題形式も、高等学校の英語授業改善の波及効果⁶を狙うためであると思われる。到達度テストとして、高等学校の英語授業内容とテストの出題内容・方法が一体化していくことは望ましいことであるかもしれないが、大学入試において授業での活動をテスト上に具現化することでどのようなリスクが生じるのか（意図した能力を測定できなくなる

6 渡部（2020）は、数々の実証的研究の知見から、大規模テストの波及効果を極めて限定的であると結論づけている。

可能性があることなど)を考慮しなければならない⁷。

5. おわりに

ここまで、共通テストの目的を確認したうえで、それに応じたテスト問題の在り方について多角的に考察してきた。今回はテスト問題の詳細な分析は行っておらず、その他考察しなければならない点も多数存在するだろう。これまで検討してきたすべての側面を実際のテストに盛り込むことは現実的ではない。しかし、英語教育学の知見はもちろんのこと、英語学、テスト理論や学力評価などの観点から十分にテスト問題について検討されたうえでのよりよい決断であったのかを今一度指摘したい。1つの側面から検討したときは、その判断が妥当であると言えることができるかもしれないが、他方からはその決定が合理的ではないとされることもある。測定したい能力を決定する際に、大学入試という選抜機能を重視して、幅広い下位能力を測定できるような出題の仕方にすれば、コミュニケーションテストの要素が薄れてしまう可能性がある。一方、コミュニケーションを意識するあまり、出題内容が表層的なものになり、本来大学入試で問われるべき基礎力が適切に測定できなくなる可能性もある。さらには、到達度テストの位置づけで、学習指導要領の内容に沿った出題がなされたところで、選抜機能が働かず、下位層がうまく識別されないことも考えられうる。そもそも、学習指導要領の目標自体がふさわしいものなのかという批判もあるだろう。このような複雑性を1つ1つ解きほぐしていくためには、やはりテストの目的に立ち返って議論すべきであり、場合によっては目的の再考も必要であろう。

最後に、テストで測定できる能力は、実際の能力の一部分にすぎないという意識も常に持ち続けておくべきである。英語科の高等学校教諭、学力評価の専門家、言語テストの専門家、教育測定学の専門家が集い、複雑性を加味したうえで、どのように折り合いをつけ、実際にテスト問題を作成していけばよいのかということ議論すべきである。

7 本稿では取り上げなかったが、テストにおいて実用的な場面を設定することに気を取られるあまり、問題で使用されている英文の適切さが軽視されていないかどうかも重要な事前検討事項であると考え。

参考文献

- Bachman, L. & Palmer, A. (1996). *Language testing in practice*. Oxford University Press.
- チャールズ・オルダーソン, キャロライン・クラッフアム, ダイアン・ウォール (著) 渡部 (編訳)
- 良典 (編訳) (2010). 『言語テストの作成と評価 あたらしい外国語教育のために』 春風社.
- 独立行政法人大学入試センター「大学入学共通テストの仕組み・運営」 (https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_gaiyou/index.html 最終閲覧日: 2021年3月1日)
- 独立行政法人大学入試センター「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」 (<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00035455.pdf&n=%E8%B3%87%E8%B3%AA%E8%83%BD%E5%8A%9B%E8%A1%A8%E3%80%90%E8%8B%B1%E8%AA%9E%EF%BC%88%E7%AD%86%E8%A8%98%5B%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%B0%5D%EF%B-C%89%E3%80%91.pdf> 最終閲覧日: 2021年3月1日)
- 南風原朝和 (編) (2018). 『検証 迷走する英語入試 スピーキング導入と民間委託』 岩波ブックレット.
- 小泉利恵・印南洋・深澤真 (編) (2017). 『実例でわかる 英語テスト作成ガイド』 大修館書店.
- 光永悠彦 (2017). 『テストは何を測るのか 項目反応理論の考え方』 ナカニシヤ出版.
- 文部科学省 (2017). 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編』
- 根岸雅史・東京都中学校英語教育研究会 (2007) 『コミュニケーション・テストへの挑戦』 三省堂.
- 大塚雄作 (2020). 「2. 大学入試における共通試験実施に関わる諸問題ーセンター試験実施の経験から」 中村高康 (編) 『大学入試がわかる本 改革を議論するための基礎知識』 岩波書店.
- 卯城祐司 (編著) (2012). 『英語リーディングテストの考え方と作り方』 研究社.
- 渡部良典 (2020) 「共通テストと民間試験導入 CEFR、波及効果その

他の課題を実証研究の成果をみながら検証する」大学入試のあり方に関する検討会議（第6回）提出資料（https://www.mext.go.jp/content/20200422-mxt_daigakuc02-000006583_6.pdf 最終閲覧日：2021年3月1日）